

国会請願署名の協力求ム!

きょうされん 第45次
国会請願署名・募金運動
全国キャンペーン
2021年12月~2022年4月

あ
たり
ま
え
に
は
た
ら
ま
い
え
ん
し
ら
べ
え
し
を

障害者権利条約を地域のすみずみに
障害のある人びとを支える
制度づくりのための
署名・募金にご協力ください。

高橋 幸子 福地 ひとみ 竹内 浩二
わたしたちも応援しています。

きょうされんでは、12月になると通常国会へ提出するための署名活動を行っています。この活動は、きょうされん結成時から取り組み、今年で45回目となり、コムハウスでも開所当時から協力をしています。障がいのある方が「どんなことで困っているか」「どんな仕組みがあれば、障がいのない人と同じ暮らしが出来るのか」について5つの請願項目を掲げ、法律の改正・新しい法律の制定を国に願い出ています。この活動により、障がいの区別なく同じ事業所に通えるようになったり、所得の低い方の利用負担が減ったり等実現していることもありますが、暮らしにくさへの課題は多くあります。

現在国会において、障がい福祉の予算は縮小の主要議題に挙げられています。地域で生活をするための場所(グループホーム)でヘルパーの支援を受けることができなくなることや、グループホームを選択できなくなる可能性があり、現在グループホームを利用している10万人以上の方や、この先利用を考えている方が不安を抱えています。この状況を打破していく為に署名を通して国に訴えていく事が必要となります。署名用紙は、コムハウスにありますので関心のある方は、コムハウスにお問い合わせください。是非ご協力をお願い致します。

担当 山本・百瀬 連絡先0263-85-2234



『障害福祉の歴史 ~保護(隔離)政策が護ったものは何だったのか~』

日本の障害福祉施策は、主に隔離政策を敷いてきた。保護という名の下に街外れに50人規模の施設や精神科病院に入れ(措置)、地域社会からある意味「排除」してきた。施設では8畳間に4人や6畳間に2人の生活。昨日まで知らなかった人と同じ部屋で暮らす。個室は教室のみ。プライベートな空間はない。いつまでここで暮らすのか、いつになったら施設を出て別の場所で暮らせるのか誰も教えてくれない。他に選択肢があるのかも教えてくれることはない。地域生活で困っていたのは障がいのある人なのに、周囲が困って施設に入れることを障がいのある人に強いてきた。隔離、保護政策は何を護ってきたのだろうか。そして、障がいのある人から何を取り上げてきたのだろうか。本当に護るべきは何だろうか。

障がいのある人のなかには、期間の長さは様々だが、小学校へ上がる頃から親元を離れて施設に入所し、施設に併設する学校などに通った経験をされた方がいる。また、なかには「就学免除」という言葉で、学ぶ権利を奪われた世代も存在する。私が出逢ってきた親御さんのなかには、支援者から我が子を施設に預けることを勧められ、涙をこらえて施設入所を選んだ方もいる。そして「こんな子に産んだ自分自身」を責める方もいた。また、親戚にさえもわが子の存在を隠し、兄弟姉妹は気をつかい、結婚を諦めて障がいのある兄弟の面倒をみる人生を選んだ方もいた。

保護・隔離政策は、一体何を護ってきたのだろうか。また、保護という名の「排除」は、なぜ生まれたのだろうか。そして、「排除」の水脈は、今も私たち一人ひとりの奥底で流れ続けてはいないだろうか。

アルプス福祉会がめざすのは、どんな障がいがあっても暮らしやすい街づくりだ。本人も親も兄弟姉妹も、それぞれが自分の人生を自分が選べる社会。そのために必要な環境(私たちの社会に必要な資源)を障がいのある人とともに整えていきたいと思っています。

(片桐)